

令和元年度

平和大使長崎派遣事業報告書

平和への思い

時代をこえて

語りつごう

松 戸 市

目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使の役割	3
平和大使長崎派遣募集要項	4
平和大使名簿	6
平和大使長崎派遣行程	7
平和大使長崎派遣帰庁報告会	16
平和の集い	17
平和大使の報告	18
「平和への道を歩むために」	藤井 星空 19
「平和のかけ橋未来へと」	新井 はるの 21
「終わらぬ戦争…そのために」	小川 ひなた 23
「長崎で学んできて」	小島 未来 25
「学んだことをどう生かし、どう伝えるか」	福土 莉奈 27
「笑顔のあふれる世界に」	齊藤 光咲 29
「2019年報告書」	小林 大起 31
「今できること」	小川 新九朗 33
「原爆投下の地 長崎市訪問を通して」	肥田 友稀 34
「平和な明日を築くために」	瀬川 千寛 36
「原子爆弾の恐ろしさ」	相馬 理子 38
「日本を最初に最後の被爆国に」	高橋 柚希乃 40
「原爆とは」	猪瀬 響樹 42
「本当の“平和”とは」	澁谷 亜依 44
「長崎派遣を通して」	蒔野 拓朗 46
「平和な社会に向けて」	佐藤 達弥 47
「平和について」	清水 啓乃介 49
「平和大使として私ができること」	松本 虎太郎 51
「長崎で学んだこと」	小川 陽翔 53
「本当の平和」	八木原 弓賀 55
「平和への一歩」	西川 叶美 57
「平和への思い 時代をこえて」	江本 彩乃 59

派遣後の活動について	61
新聞掲載記事	66
長崎平和宣言（令和元年8月9日）	67
歴代平和大使名簿	72



～ 平和大使長崎派遣事業にあたって ～

本市は、「世界平和都市」を宣言して以来、毎年様々な平和事業を展開しており、その一つとして「平和大使長崎派遣事業」を実施しております。この事業は21世紀を担う市内中学生を原爆投下の地である長崎市に「平和大使」として派遣するもので、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学び、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育てていただくことを目的としております。平成20年度に始めた本事業は今年で第12回目を数え、延べ242名を平和大使に任命しました。

さて、今年の8月9日、長崎市平和公園において「被爆74周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が開催されました。

式典には66の国と地域の代表と、約5,900人の参列者が集まり、原爆犠牲者の冥福を祈り黙とうを捧げました。このことから核兵器廃絶を求める声が世界的な流れになりつつあることが感じられます。

そして、長崎市長は式典の「長崎平和宣言」の中で、世界の市民社会の皆さんに「戦争体験や被爆体験を語り継ぐこと、人の痛みがわかることの大切さを子どもたちに伝え続けること」を呼びかけました。また、「私たち一人ひとりの力は、微力ではあっても、決して無力ではない」と訴えました。

被爆者の平均年齢は82歳を超え、このままでは被爆体験や戦争体験の記憶は風化してしまう恐れがあります。悲惨な記憶を決して忘れないために、そして戦争や核兵器の無い平和な未来を実現していくために、私たちは、直接体験談を聞くことができる最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、若い世代に継承するということが使命であると考えております。

併せて、世界平和都市宣言における、世界の恒久平和の達成を念願するという理念から、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、様々な角度から、広い視野を持った施策を行う必要があると認識しているところです。

本事業を通して、平和大使が長崎の地で学び感じた被爆の実相や平和の尊さを周りの人に伝え、一歩ずつでも平和な世界、平和な未来に近づくことを願い、今後も本事業を実施してまいりたいと考えております。

～ 世界平和都市宣言 ～

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

• World Peace City Declaration

[英語]

March 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nationwide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the "World Peace City".

City of Matsudo

• 世界平和都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、

建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

～ 平和大使の役割 ～

- 1 松戸市世界平和都市宣言を知る。
- 2 松戸市の平和スローガンである「みんなで築こう世界の平和」という心を持つ。
- 3 平和への願いを込めた千羽鶴を作製して長崎に献呈する。
- 4 長崎を訪問するにあたって「原爆とはどんな兵器なのか」「戦争がどんなに悲惨なものなのか」などを学び、平和の大切さを認識する。
- 5 長崎市では「青少年ピースフォーラム」に参加して、全国の自治体及び地元長崎の青少年たちと一緒に平和について学び、語り合う。
- 6 長崎訪問終了後、感想や記録をまとめて報告する。
- 7 長崎訪問で経験したこと、思ったことなどを家族や友達などに伝えていく。

～ 平和大使長崎派遣募集要項 ～

中学生の皆さんへ

世界平和都市宣言事業 第12回「平和大使長崎派遣」大使募集要項



松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

【 平和大使とは 】

・「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言に基づき、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて事前研修、派遣、事後研修を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

【 対象 】

・市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、裏面の日程にある**事前研修、派遣、事後研修全てに参加できる人**を対象とします。※既に平和大使に任命された方は、対象となりません。

【 定員 】

・22名（申込者が定員を超える場合は抽選とします。）
同行者：松戸市職員4名・添乗員1名

【 費用 】

・市の負担 松戸から長崎までの往復交通運賃、宿泊代、長崎での移動バス電車運賃、8/7の夕食、8/8、8/9の3食、8/10の朝食、昼食
・自己負担 事前研修等、会場(市内)までの交通費、8/7の昼食など

【 申込方法 】

・参加申込用紙に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

【 提出期限 】

・平成31年5月20日(月)までに学校へ提出

【 研修日程 】

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。（自主学習）

- 6月30日(日) 9:30～12:00 結団式及び第1回オリエンテーション
 青少年ピースフォーラム等の内容説明
- 7月 7日(日) 10:00～15:00 第2回オリエンテーション
 戦争、原爆、平和についての自主学習
- 7月28日(日) 10:00～12:00 第3回オリエンテーション
 自主学習とスケジュールの確認

2 派遣研修

(1) 場所：長崎市

(2) 期間：8月7日(水)～8月10日(土) 3泊4日

(3) 内容：青少年ピースフォーラムへの参加等

〈青少年ピースフォーラム〉

8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

(4) 「平和大使長崎派遣」日程表(仮)

8/7(水)	松戸市役所 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル (自主学習)	
8/8(木)	午前	平和案内人のガイドによる被爆建造物見学 〈場所:原爆落下中心地公園、城山小学校など〉
	14:00～15:10	開会行事(被爆体験講話など) 〈場所:平和会館ホール〉
	15:20～17:20	参加型平和学習(屋内) 〈場所:平和会館ホール〉→原爆資料館見学
8/9(金)	午前	平和祈念式典への参列 〈場所:平和公園 ※人数の都合上、別会場になる可能性があります。〉
	13:30～15:30	参加型平和学習(屋内) 〈場所:平和会館ホール〉
8/10(土)	ホテル → 長崎空港 → 羽田空港 → 市役所帰庁 → 帰庁報告会 → 市役所解散	

3 事後研修

8月23日(金) 平和大使長崎派遣報告書(作文)の提出

※提出期限 派遣研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、平和大使長崎派遣報告書を作成します。

10月～11月頃(時期調整中)

「平和の集い」へ参加し、報告会を行います。

～ 平和大使名簿 ～

ふじい 藤井	そら 星空	(第一中学校 3学年)
あらい 新井	はるの	(第二中学校 3学年)
おがわ 小川	ひなた	(第三中学校 2学年)
こしま 小島	みらい 未来	(第四中学校 3学年)
ふくし 福士	りな 莉奈	(第五中学校 3学年)
さいとう 齊藤	みきき 光咲	(第六中学校 1学年)
こはやし 小林	ひろき 大起	(小金中学校 2学年)
おがわ 小川	しんくろう 新九朗	(栗ヶ沢中学校 1学年)
ひだ 肥田	ともき 友稀	(六実中学校 1学年)
せがわ 瀬川	ちひろ 千寛	(小金南中学校 3学年)
そうま 相馬	りこ 理子	(古ヶ崎中学校 1学年)
たかはし 高橋	ゆきの 柚希乃	(古ヶ崎中学校 2学年)
いのせ 猪瀬	ひびき 響樹	(牧野原中学校 3学年)
しぶや 澁谷	あい 亜依	(根木内中学校 1学年)
まきの 時野	たくろう 拓朗	(河原塚中学校 3学年)
さとう 佐藤	たつや 達弥	(新松戸南中学校 2学年)
しみず 清水	ひろのすけ 啓乃介	(金ヶ作中学校 1学年)
まつもと 松本	こたろう 虎太郎	(和名ヶ谷中学校 2学年)
おがわ 小川	はると 陽翔	(旭町中学校 1学年)
やぎはら 八木原	ゆか 弓賀	(小金北中学校 2学年)
にしかわ 西川	かなみ 叶美	(聖徳大学附属女子中学校 2学年)
えもと 江本	あやの 彩乃	(専修大学松戸中学校 1学年)

～ 平和大使長崎派遣行程 ～

6月30日（日）

◆結団式・第1回オリエンテーション (市役所議会棟3階特別委員会室にて)

結団式では各学校から選ばれた平和大使22名に任命証が交付され、一人ひとり大使としての抱負を発表しました。

オリエンテーションでは事業の目的や大使の役割を確認し、青少年ピースフォーラムの説明を受けました。また、先輩大使に貴重な体験談を話していただきました。



〈任命証交付〉



〈平和大使長崎派遣結団式〉



〈オリエンテーション〉



〈先輩大使の体験談〉

7月7日（日）

◆第2回オリエンテーション（市役所別館地下1階研修室にて）

長崎派遣に向けて、リーダー・サブリーダーや派遣中のルールなどの必要事項を話し合
って決め、コミュニケーションを図りました。

午後はグループになり、それぞれが考える平和について意見交換をしました。そして、グ
ループごとに発表をした後、各々が「わたしが『平和』のためにできること」を改めて考
え、意見を集約しました。

※意見を集約したものは、市主催の平和パネル・ポスター展にて市民の皆様にご覧いただきました。



〈リーダー決めの様子〉



〈リーダーを中心に必要事項決定〉



〈グループワーク〉



〈平和パネル・ポスター展の様子〉

7月28日（日）

◆第3回オリエンテーション（市役所別館地下1階研修室にて）

長崎派遣のスケジュールと注意事項を確認した後、原爆資料館に献呈する千羽鶴を作るた
め、各々が折ってきた鶴と市民の方々が折ってくれた鶴を平和への願いを込めて糸でつな
いでいきました。



〈スケジュール確認〉



〈千羽鶴作製〉

8月7日（水）

◆9：15 長崎へ出発

9時松戸市民劇場に集合し、出発式を行い、家族や関係者に見送られてバスで羽田空港に向かいました。13時羽田空港発の便に搭乗し、14時45分長崎空港に到着、バスで長崎市内の宿泊ホテルへ向かい、16時10分頃ホテルに到着しました。



〈出発式〉



〈羽田空港出発ロビー〉

◆16：40 自主学习（立山防空壕見学）

ホテル到着後、徒歩で長崎県防空本部があった立山防空壕に行きました。ここでは、戦時中県知事などが警備や救護などの指揮を行っていた場所で、原爆投下時はここから国へ被害情報を伝えたそうです。その役割を管理人の方が説明してくださり防空壕内を見学しました。



〈立山防空壕〉

◆19：00 千羽鶴作製（ホテル会議室にて）

原爆資料館へ献呈するため、大使が作製した折り鶴と市民の方々からいただいた折り鶴で千羽鶴を完成させました。また、平和への願いを込めた千羽鶴に添える標語を大使皆で考え「平和への思い 時代をこえて 語りつごう」に決めました。



〈千羽鶴作製〉



〈短冊に思いを込める様子〉

8月8日（木）

◆9:00 自主学習（被爆建造物見学）

朝7時55分にホテルを出発し、路面電車に乗り、被爆建造物見学へ向かいました。

見学は2班体制で、それぞれボランティアの平和案内人によるガイドのもと、原爆落下中心地、城山小学校、平和公園を約2時間かけて歩いて巡りました。平和案内人の方が、当時の悲惨な様子を資料を用いてわかりやすく説明してくれました。実際に被爆建造物を自分の目で見ることで、被害がどれほどのものだったのか伝わってきました。

また、11時2分には長崎の鐘を皆で鳴らすことができ、とても貴重な体験をしました。



〈原爆落下中心地碑〉



〈浦上天主堂遺壁〉



〈被爆校舎（城山小学校平和祈念館）〉



〈平和の泉（平和公園内）〉



〈平和祈念像（平和公園内）〉



〈長崎の鐘（平和公園内）〉

◆12:35 千羽鶴献呈 (原爆資料館にて)

昼食後、前日完成させた大使と市民の思いをのせた千羽鶴を原爆資料館に献呈しました。



〈千羽鶴献呈〉



〈松戸市の千羽鶴〉



◆12:40 自主学習 (原爆資料館見学)

千羽鶴を献呈した後、原爆資料館を見学しました。資料館には、原子爆弾の実物大模型や原爆の被害を受けた物品、被爆された方の写真など、資料がたくさん展示されており、改めて原爆の恐ろしさを実感しました。



〈原子爆弾「ファットマン」の実物大模型〉



〈原爆の被害を受けた物品など〉



◆14:00 青少年ピースフォーラム（開会行事）参加
（長崎市平和会館にて）

青少年ピースフォーラムには、全国から多くの小・中・高校生が参加しました。開会行事では、地元高校生や大学生の青少年ピースボランティアによる開会宣言、長崎市長挨拶の後、築城昭平さんによる被爆体験講話を聞きました。



〈開会宣言〉



〈被爆体験講話〉

◆15:20 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加
（長崎市平和会館にて）

続いて、青少年ピースボランティアの進行による平和学習に移りました。参加者全員がグループに分かれて、自己紹介レクリエーションで緊張をほぐした後、スライド学習、原爆資料館周辺を巡るフィールドワーク、紙芝居により被爆の実相を学び、1日目の青少年ピースフォーラムが終了しました。



〈自己紹介レクリエーション〉



〈スライド学習〉



〈フィールドワーク〉



〈紙芝居〉

8月9日（金）

◆10:40 平和祈念式典参列（平和公園・原爆資料館ホールにて）

「被爆74周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」参列の日を迎えました。

朝8時35分にホテルを出発し、大使たちは平和公園で参列する組と原爆資料館ホールで参列する組2班に分かれて、それぞれ緊張した面持ちで会場に入りました。

厳粛な空気の中、式典が行われ、原爆投下時刻の午前11時2分、サイレンと長崎の鐘が鳴り響きました。原爆犠牲者のご冥福と世界の恒久平和を祈り、黙とうを捧げました。

被爆74周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

式次第

- 10時40分 被爆者合唱
- 10時45分 開式
 - 46分 原爆死没者名奉安
 - 48分 式辞（長崎市議会議長）
 - 52分 献水
 - 54分 献花
- 11時02分 黙とう
 - 03分 長崎平和宣言（長崎市長）
 - 12分 平和への誓い
 - 19分 児童合唱
 - 24分 来賓挨拶
 - 40分 合唱 千羽鶴
 - 45分 閉式



〈平和公園〉



〈平和公園での黙とうの様子〉



〈平和祈念像〉



〈原爆資料館での黙とうの様子〉

◆13:30 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加
 （長崎市平和会館にて）

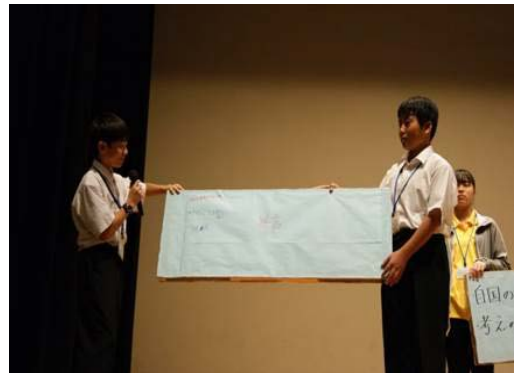
午後は、前日に引き続き、青少年ピースフォーラムに参加しました。グループとなり、前日の平和学習を踏まえて「争いの原因って何だろう？」を考え、そのうえで「それを解決するために…」をテーマに、意見交換をしました。そして各々が「My 平和宣言」を作りました。

グループ発表では、大使たちは班の代表として発表するなど、積極的に取り組みました。

2日間の青少年ピースフォーラムを通じて、全国から集まった同年代の参加者と交流ができ、大変貴重な体験となりました。



〈意見交換〉



〈発表〉



〈My 平和宣言〉



〈参加者集合写真〉

世界平和祈念行事実行委員会（事務局：長崎市被爆継承課）が開催した「令和元年度世界平和祈念ポスター・標語展」への応募者のうち2名の大使が、標語部門・中学の部で、努力賞を受賞しました。その大使と標語を紹介します。

新松戸南中学校 2年 佐藤 達弥
 「平和への道は 相手を思う心が 創り出す」

専修大学松戸中学校 1年 江本 彩乃
 「広げよう 平和な世界 あふれる笑顔」



◆19:40 自由学習（グラバー園見学）

青少年ピースフォーラムを終え、夕食後、自由学習に向かいました。

大浦天主堂下を通り、グラバー園を散策しました。グラバー園から見た長崎の夜景は美しく、大使たちの良い思い出となりました。



〈大浦天主堂下〉



〈グラバー園〉

8月10日（土）

◆8:00 松戸へ出発

4日間お世話になったホテルの方にあいさつし、バスで長崎空港へ向かいました。

10時50分長崎空港発の便に搭乗し、長崎を後にしました。飛行機の中では、各々が帰庁報告会に向けて準備をしました。

12時33分羽田空港到着。市の迎えのバスで、市役所へ向かいました。

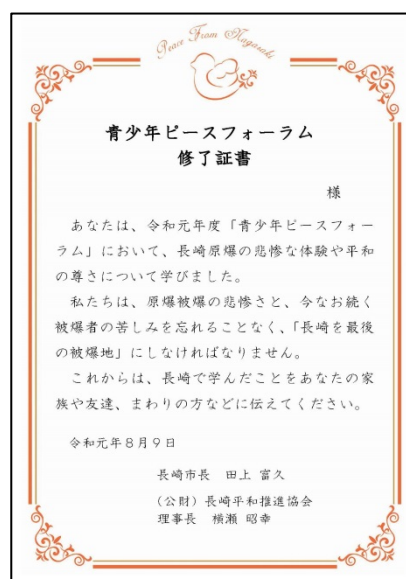
◆15:00 松戸市役所到着

松戸市役所に到着。皆元気で帰ってくることができました。

帰庁報告会が始まる前に、大使一人ひとりに青少年ピースフォーラムの修了証書が渡されました。



〈修了証書授与〉



〈修了証書〉

～ 平和大使長崎派遣帰庁報告会 ～

◆15:30 帰庁報告会（市役所議会棟3階特別委員会室にて）

副市長をはじめ、出迎えてくれた家族に、長崎で見て、聞いて、体験したこと、また派遣を通して新たに感じた平和への思いなどを一人ひとり報告し、4日間の派遣日程を終えました。



〈帰庁報告の様子〉



〈青少年ピースフォーラム修了証書を手に集合写真〉

～ 平和の集い ～

10月6日（日）

◆13:00 平和大使長崎派遣報告会（聖徳大学にて）

「平和の集い」の中で、大使の役割を果たすべく、長崎派遣を通して学んだことや感じたことを、市民の皆様へ報告しました。

スクリーンに映し出した写真などに合わせて、事業の目的や大使の役割、結団式から長崎派遣、そして帰庁報告会までの流れを紹介するとともに、場面ごとに学んだことや感じたこと、決意を伝えました。



今年で戦後74年が経ちました。私たちの周りでは、戦争を実際に体験した方々が高齢になり、少なくなっているため、直接お話を聞くことがだんだん難しくなっています。

しかし、戦争で命を落とした犠牲者や被爆者の方々の思いを無駄にしないために、そして今後の平和を実現していくために一番重要なことは、私たち平和大使を含めた未来を担う若い世代が、平和への関心を高め、その大切さを代々受け継いで行くことだと思います。

私たちは、長崎で見て聞いて感じた戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さをたくさんの人に伝え、次の世代に、未来の人々に伝えていく活動をしていきます。

平和大使の報告



「平和への道を歩むために」

第一中学校 3年 藤井 星空

「平和とは何か」

「平和への近道は何だろう」

この言葉はよく耳にしますが、二つの言葉は簡単に見えてとても難しい言葉です。私の答えとしては、平和に近道などありません。平和な世界に、みんなが幸せを感じる世界にするには何枚、何千枚というたくさんの壁が平和への道をはばむでしょう。

どうしたら壁の向こう側に行けるのか、壁を登れるのか、それとも壁を壊すのか。たくさんの方を試し解決します。

それでも壁の向こう側へ行くことが無理だったら、今度は周りの人の手を借ります。壁の向こう側に行くことを絶対に諦めません。

私は今、中学生です。何か行動を起こせる年齢ではありません。けれども、この先どのような道へ進むかどうするか決めるのは私です。私は、病気で笑顔ではない人がいるうちは平和であるとは思いません。そこで、私が平和な世界のためにできることは、医者になることだと思いました。

また、私は学校に行けない時期がありました。それは周りからしたら悪いことであると捉えられがちです。けれども、私は良い経験だったと思っています。なぜ学校に行けなかったことが良い経験になるのか、と思う人はたくさんいると思います。私は小学生の頃、挫折という言葉を知りませんでした。

しかし、中学受験で失敗して初めて挫折を味わいました。自分の唯一の取り柄であった勉強がなくなってしまったように思えて、すべてが嫌になるとともに、すべてが怖く感じました。そのことがきっかけで学校に行けなくなってしまいました。しかし、私はお母さんのおかげで今では毎日学校に行けています。このような経験をしたからこそ、今の私があると思います。

そこで、私がやらなくてはいけないことが三つできました。

一つ目は医者になって病気の人を治して笑顔にすること。二つ目は私のように学校に行けない子を救うこと。三つ目はアフリカなどで学校に行きたくても行けない子を救うこと。この三つを必ず達成します。そして、三つのことを達成する前に私にはやるべきことがあります。

その一つが、私たちが歩んできた歴史を学ぶことでした。人間は、智慧のあるすばらしい生き物ですが、時として過ちを犯します。それを私は今回の長崎派遣でより深く学ぶことができました。同じ過ちを繰り返さないために忘れてはならないのは歴史であることを改めて感じました。

人の心が分かる人、人の痛みも自分の痛みとして感じられる人、人に自分の優しさを分かち合える人、そのような人に私はなります。

「平和のかけ橋未来へと」

第二中学校 3年 新井 はるの

この度、平和大使として被爆地である長崎を訪れ、核兵器や戦争の恐ろしさを改めて学び、平和への思いや考え方が変わりました。長崎を訪れる前は、悲惨な写真から目を背けてしまった私がありました。

「平和って何だろう」「幸せって何だろう」と考えながら被爆地である長崎に向かいました。私は、原爆資料館の中に入り空気が違うと感じました。

長崎に投下された原子爆弾「ファットマン」は上空約500mで爆発し、その爆発力はTNT火薬21キロトン分、例えると4トン積みトラック約5200台分と聞き、とても驚きました。ものすごい威力だったことを写真や溶けてしまった瓶などの残った物で具体的に知ることができました。私が体験した中で特に心に残ったことを二つ紹介したいと思います。

一つ目は、旧城山国民学校校舎を見たことです。1945年8月9日午前11時2分、被爆地から西方約500メートルの場所にあり、当時の校舎は鉄筋コンクリート3階建てでした。原爆により2、3階は全焼してしまい、学校にいた教職員31人のうち28人が亡くなったことを学びました。

二つ目は、被爆者の築城昭平さんのお話です。築城さんは、今年92歳、原爆落下当時は18歳で爆心地から約1.8キロメートル離れた学校の寮で被爆したそうです。長崎の人には、8月6日広島に投下された原子爆弾の被害状況は口止めにより知らせてもらえていなかったと言っていました。そし

て、8月9日長崎にも原子爆弾が投下され、あたり一面が暗くなり、人とは思えないほど肌がただれている人、骨が見えてしまっていて亡くなっている人がたくさんいたと築城さんのお話で知りました。

現在、多くの方が平和を願っています。戦争を二度と繰り返してはいけません。たった一つの原子爆弾でたくさんの方の命を一瞬にして奪った出来事を忘れてはいけません。私は、今回学んだことをたくさんの方に伝えていきたいと思います。当たり前のことを当たり前にする事ができる平和な世の中を守るために。

「終わらぬ戦争…そのために」

第三中学校 2年 小川 ひなた

「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」

これは、平和祈念式典で被爆者の方々が歌った「もう二度と」という曲の歌詞の一部です。この言葉に込められた想いは、決して浅いものではなく、大切な人を原爆により亡くした、とても重みのある深い想いが込められていると思います。

そして、私が一番心に残っている「われなお生きてあり」の話を聞いてもらいたいと思います。この話の主人公の福田須磨子さんは8月9日爆心地から1.5キロメートル離れた女学校で被爆されました。8月9日の日記から心に残った文を抜粋してご紹介したいと思います。「左手のガラス窓が『ピリリー』と大きく震えて、強烈な青白い閃光が煌めくと近くに雷でも落ちたように『ピシャッ』というものすごい音がした。何か激しい力で物を叩き付けるような恐ろしく大きな音。いろんな物が、腹這いになった私たちの上に落ちてくる。しばらくすると周囲が『シーン』と不気味に静まり返ってしまった。体を動かし『動く』。私はボソボソと這い出した。私たちは表玄関にまわって道路に出た。そして驚いた。これはどうしたというのか。電線という電線はずたずたに切れてぶら下がっている。家という家は押しつぶされずに火の手が上がっているのもある。倒壊した家、火のついた家の下敷になり助けを求める声、うめき声が聞こえる。私たちが逃げていく狭い道路は、

すでに傷を負った者、ひどい皮膚がボロ雑巾のようにめくれて垂れ下がりそれをぞろぞろと引きずって歩く者、体中赤剥けになった者たちでいっぱいであった。一目で死に瀕していると思う者が、もはや歩くこともできず腹這いになっている。腕をわなわなと引きずらせもがき進んでいる。その群はすでに人間の姿を失った化物の行列であり死の行進であった。」

ここまで聞いたとき、私はとても苦しい気持ちになりました。目を閉じ想像してみてください。自分の家族や友人、大好きな家が、生活がたった一発の原子爆弾によって、失われることを…。

世界には13,880発もの核兵器が存在しています。私は核兵器を持つことで威嚇し合い平和が生まれると考えていました。しかし「目には目を。歯には歯を。」ではいつまでも戦争を繰り返していただくだけであると思います。一方で、話し合いだけでは済まされないことがあります。アメリカのドラマで「長崎するぞ」という言葉が使われたり、学校のロゴマークにきのこ雲が使われたりするなど、核兵器は戦争を終わらせるために必要不可欠なものとして考えられています。被害者側と加害者側で考えが大きく違うのです。戦争は簡単には終わりません。しかし、私たちが戦争について考えることによって過去を過去で終わらせないことができます。

私は、平和を願い、長崎で学んだことを友人や家族、次の世代の人々に伝えていきたいと思います。

「長崎で学んできて」

第四中学校 3年 小島 未来

僕は長崎に行って原子爆弾について学んできました。そこで、原子爆弾はとてつもない殺人兵器ということが分かりました。原子爆弾が爆発すると熱線により地表の温度は三千度近い温度になり、近くにある家などを全焼させてしまいます。そして原爆資料館で見たのは、熱線を浴びせられて蒸発した死者や溶けた皮膚を指から垂らしている人、体に変色して水を欲しがっている人がいる地獄のような光景でした。たとえ生き残ったとしても原爆の放射線をたくさん浴びたことで、数日から十日くらいで命を落とした人や軽くても脱毛、発疹などの症状が表れる「急性障害」になった人、さらに長い年月を経てガンなどが発症する「晩発性障害」になった人もいます。生き残った人も放射線被害によって今も苦しんでいる人がいます。実際に被爆者の築城昭平さんから体験講話を聞かせてもらいました。築城さんは、原爆が落とされたとき、全身に火傷を負いましたが、布団を体に巻きつけて寝ていたのでガラスの破片が刺さらなかったことと家が倒壊しなかったおかげで生き残ることができたと話されていました。また、外に出てみるとひどい火傷で顔の皮膚が垂れ下がっている人や真っ黒になってしまった人が多くいたそうです。築城さんは、左腕と左足の先にひどい火傷を負ったので五時間かけて、どうにか隣町まで歩き、医者に診察してもらおうとしましたが、治療を受けたい人が二百人以上いて、治療が受けられませんでした。また、患者が多す

ぎて薬もなくなってしまったそうです。

このような話を聞いて、僕は絶対に戦争はいけないものだと感じました。

世界では13,880発もの核兵器が存在します。その中でも、アメリカとロシアがほとんどを占めており、もし衝突が起きたら、世界が滅亡してしまうかもしれません。抑止力のために核兵器を持つことは本当の平和とは言えません。核兵器を持たない、本当の平和が訪れることを願っています。そのために自分ができることは何か考えながらこれから行動していきたいと思います。

「学んだことをどう生かし、どう伝えるか」

第五中学校 3年 福士 莉奈

長崎への派遣を終え、考え、感じたことを今後の生活にどう生かし、どう周りに伝えれば良いのだろうか。

私が、今回長崎に行って感じたこと、それは「平和」という言葉は、簡単な言葉に思えて、とても難しい言葉であるということ。ですが、一人一人が「平和」という言葉を知り、学び、考えることで「平和」は実現できるのではないかと思いました。今でも世界中には、様々な理由で苦しんでいる人がいます。国同士協力すればこのような人たちを何人救えるのでしょうか。

私は『平和』の実現のために、そのような人を一人でも多く救える人になりたい。たくさんの人を傷つけ、たくさん尊い命を奪う戦争を無くしたい。」それが、私が平和大使として長崎に行き、考えたことです。

そして、私は青少年ピースフォーラムで「周りの人のことを考えられる人になる」と宣言しました。この宣言したことを普段の生活に生かそうと思いました。

今でも、原子爆弾の放射線による後遺症で苦しんでいる人がいます。原爆投下により一瞬で亡くなってしまいう人もいましたが、生き残っても苦しまなければならない人がいることに私は心がすごく痛みます。なぜ戦争をしたのだろう。考えれば考えるほど私は理解できません。日本も含めて世界の国々が他の国のことを考えていれば第二次世界大戦のような戦争は起こらなか

ったと思います。誰が悪いとかではなく「相手のことを考え行動すること」ができなかったからこそ、たくさんの人を傷つけることになってしまったのです。私は、戦争が起こった時代を反面教師とし「周りの人のことを考えられる人になりたい」と思います。

「笑顔のあふれる世界に」

第六中学校 1年 齊藤 光咲

今思うと私は、長崎に行くこと、「原子爆弾」の怖さ、そして、「平和」の大切さ、全てに対しての考え方が浅かったのかも知れません。

1945年8月9日午前11時2分。長崎はたった一発の原子爆弾で一瞬のうちに地獄になり変わりました。長崎の地に落ちた原子爆弾「ファットマン」は2019年8月9日までに182,601人もの尊い命に加え、関係のない動物の命を奪いました。皮膚が溶けてしまった人、苦痛に耐えながら水を求めた人、顔もわからないほど黒こげになった人、そして「子どもだけは…」と叫んだ人もきっといたでしょう。当時の様子やつらさを、私が簡単に想像してはいけないような気がしました。原爆は、大切なものをこの手から落としてしまう、とてもつらく、悲しいものだと私は知りました。

私が特に印象に残ったことは二つあります。

一つ目は、死に際に多くの人が水を求めたということです。原爆が落とされたときの温度は、太陽の黒点と同じ、もしくはそれ以上の温度でした。地球から離れている太陽ですら、私たちは「暑い」と思うのですから、当時の人たちは、私たちが思うよりも考えられないほど熱かったのでしょう。水を求める人たちは、どれほどつらかったのでしょうか。簡単に想像できるものではありません。

二つ目は、放射線被害についてです。怪我をしていなかったのに一週間後

には亡くなってしまった人など放射線は、原爆の被害をとて大きくしたものだと思います。髪の毛が抜け落ちるだけではなく、がんになってしまったり、白血病になってしまったり、放射線、そして戦争は、その人のその後の人生を狂わせてしまうのです。人が人を狂わすものをつくっている。なぜ同じ人間なのに、戦争が起こるのでしょう。このようなことをして誰が喜ぶのでしょうか。誰もが、悲しみ、苦しんでいます。74年経った今でも、つらい思いをしています。それは、これから先も変わらないでしょう。私も見ただけで目を背けたくなるようなつらい写真を見て、とても悲しい気持ちになりました。きっとこの感情は何年経っても忘れないと思います。

私は長崎に行って、つらい、苦しいだけでなく言葉にできないほどの感情をいただきました。被害を受けていない私でも胸がギュッとするような思いをしました。もう誰も悲しむようなことをしてほしくない。今の私にできることはほんの少しですが、これからの未来、誰もが明るく、笑顔のあふれる世界の一步に繋がるのであれば、どのようなことでも取り組みたいと思います。私は世界中の人が、笑顔で、楽しく過ごせる日々を願っています。

「2019年報告書」

小金中学校 2年 小林 大起

8月8、9日と、私は松戸市平和大使として、平和について学び、考えを深めてきました。私は、長崎に落とされた原爆について、よく知りませんでした。知っていることといえば、第二次世界大戦中に原爆が落ち、多くの人々が亡くなったことくらいでした。私は、今回、平和大使長崎派遣を経て、その認識が大きく変わりました。まずは、平和公園に行くと、その大きさに驚きました。また、入ってすぐに平和の像があるのかと思っていましたが、その前に平和の泉がありました。被爆された方々は恐ろしいほどの熱量で体の中まで焼けただれ、水を欲しがり、亡くなっていったと聞き、これは、その人たちの想いから作られた泉だと推測できました。その先へ行くと、たくさん石像がありました。石像の台座をよく見ると「ソヴィエト社会主義共和国連邦」「ドイツ民主共和国」と書かれていました。ソ連や東ドイツのような国が長崎の平和を祈って寄贈したと考えると、とても感慨深かったです。また、平和の鐘を鳴らすこともできました。

次に、青少年ピースフォーラムに参加しました。私は、人見知りなのでとても緊張していましたが、周りの人たちが気さくに話しかけてくれ、リラックスでき、意見を出し合う場でも、仲間たちと一緒に平和について語り合うことができました。自分とは違うアプローチで平和について考えると、また違った考えを持つことができ、平和についてより深く知ることができました。

そこで、一つはっきりと分かったことがあります。それは原爆の惨状や平和の大切さを忘れてはいけないということです。日本は唯一の被爆国であり、原爆の悲惨さを伝えていく使命があります。そのためには、私たち一人ひとりがしっかりと平和について理解し、その大切さについて、後の世代へと伝えていくことができれば、世界に平和の輪ができ、平和な世界へとなっていくと思います。

「今できること」

栗ヶ沢中学校 1年 小川 新九朗

僕は、今回平和大使長崎派遣に参加して、たくさんのことを学んで、考えて、すごく勉強することができました。

その中でも、三つ印象に残ったことがあります。

一つ目は、原爆資料館を見学したことです。特にファットマンの実物大模型が印象に残りました。理由は、ソフトボールほどの大きさの核で、あれほどの被害をもたらすということに衝撃を受けたからです。この時僕は、頭の中で思い浮かべようとしていましたが、本当にこの大きさであれほどの威力を生み出すのかと信じられませんでした。

二つ目は、被爆者の方のお話です。いろいろなお話を聞く中で、資料では伝わらない実際の雰囲気はひしひしと伝わってきて、気付いたら目から涙が出てきました。今まで感じたことがない不思議な感覚になりました。

三つ目は、平和祈念式典の様子です。僕は、原爆資料館ホールで参列しましたが、特に被爆者合唱を聴いて、それだけで心が動かされました。そして、長崎を最後の被爆地にしなければならないと思いました。

最後に、僕は将来、この体験を忘れることなく、語り継いでいきたいと思っています。このような体験をさせていただき、色々な方々に感謝申し上げます。

「原爆投下の地 長崎市訪問を通して」

六実中学校 1年 肥田 友稀

長崎派遣が決まり、オリエンテーションを重ねるごとに気持ちが高まっていき、原爆や戦争の悲惨さを勉強して派遣に臨みました。しかし、原爆投下の地を実際に訪れてみると想像を遥かに超えていました。事前に勉強をして行ったものの派遣前はどこか他人事に考えてしまう自分がいて、被爆建造物や原爆資料館などの見学をし、核兵器の恐ろしさを学んでいくうちに自分の意識変化に気づいていきました。青少年ピースフォーラムで全国から派遣されてきた同世代と平和について意見交換をし、グループの代表で発表させてもらうなど貴重な体験の中で、とても刺激を受けました。また、平和公園では、11時2分に平和の鐘を鳴らさせてもらったり、原爆資料館で原子爆弾が落とされた直後の音を聞き、全身が震えるなど、現地でしかできないことを経験しました。

当事の長崎市はとても悲しみに包まれていました。今の自分の住んでいる街はどうだろう。自分は今まで誰かと戦争について深く語ったことはなく、小学校六年生の時、授業で少し習ったことがあるくらいで、毎年この暑い時期にテレビを通して家族の中で話題に上がる程度でしたが、今年は式典に参加して、すべての方が平和を祈っている姿を間近で見て自分に何ができるか考えることができました。オリエンテーションから聞いていた言葉「君たちは直接被爆された方のお話を聞ける最後の世代」その言葉の意味が生き証人

である築城昭平さんと実際に会って分かりました。92歳の築城さんは18歳の時、原子雲の下にいて、一瞬にして何もかも吹き飛び、この世の地獄絵図、恐ろしいほどの光景、あたりは真っ黒と真っ赤、この世の人の姿とは思えないと、事細かに話してくれ、絶対に教科書では伝わらないものを感じ取ることができました。被爆者は「くり返さないで」「この世界から核兵器を廃絶してほしい」「長崎を最後の被爆地とするために皆さんの力を貸して下さい」と願い、訴えていました。自分は直接聞いてとても感銘を受けました。なぜなら、これからの未来を背負っていく自分たちの平和の道だからです。これからは自分も発信者の一人になり、現地で学んだこと、感じたことを多くの人に伝え、発信していきたいと思います。

最後に一番印象に残った言葉を紹介します。

「平和の原点は人の痛みを分かる心を持つこと」

これは、被爆された吉田勝二さんの言葉です。みんなが人の痛みを分かる心を持てば、争いごとがなくなり全世界が平和になると思います。自分も常に心がけ平和という計り知れないほどの大きな目標を目指して無関心にならず、一步ずつ着実に歩んでいこうと思います。そしてこの長崎派遣に参加できたことを無駄にしないよう、これからも積極的に学ぶ姿勢を大事にしていきたいと思います。

「平和な明日を築くために」

小金南中学校 3年 瀬川 千寛

1945年8月9日午前11時2分、長崎県長崎市松山町の上空500メートルで原子爆弾『ファットマン』が炸裂しました。

このたった一発の原子爆弾が炸裂したことで、18万2,601人ものが今年の8月9日までに死没し、動物など生きとし生ける多くもの命も奪われました。私は長崎に行き、平和公園を中心とする長崎市内の被爆遺構や原爆資料館を巡る中で、11時2分で止まった時計や原子爆弾の熱線による火傷で皮膚が赤くただれてしまった人間とは思えない姿になった人の写真、荒野と化した長崎の写真などを目の当たりにして、平和がいかに尊いものなのか、核兵器がどれだけ恐ろしい物なのかを知り、次の世代や外国の人にも伝えていく必要があると思いました。

74年前の8月9日、長崎に大きな被害を残した核兵器は、今もなおこの世界で9カ国もの国が保有しており、合計で13,880発の核兵器が存在しています。74年前の出来事が風化されつつある中で、被爆者の方々は、世界の誰にも、二度とこの経験をさせてはならないと。長崎を最後の被爆地にするために、強い思いを伝え続けています。しかし、現状では核兵器は役に立つという考えが再び世界に広がり始め、核兵器廃絶のために強い思いを伝え続けてきた被爆者の方々の努力は次々と壊されています。

「私たち一人ひとりの力は、微力であっても、決して無力ではないのです。」

と平和祈念式典の『長崎平和宣言』の中で長崎市長が仰っていました。数少なくなってきた被爆者の方々が生きているうちに、被爆者の方々の「くり返してはならない」という強い思いが世界に届くように、被爆者の思いや訴えを直接聞いたからこそ分かることを多くの人に伝えていくことが、私たち平和大使の大きな役割であり、次に進むべきステージです。まずはその第一歩として、家族や学校の友達や先生といった身近な人に伝えることから始め、最終的には英語という世界共通の言葉で核兵器を保有している国の人に、核兵器の脅威を知ってもらいたいです。国連や多くの国にも被爆者の方々と同じ思いを持っている人が大勢います。小さな力でもたくさん集まれば大きな力になります。過去には、小さな声の集まりが大きな声となり、世界を動かしました。次は、「核兵器廃絶」と「世界恒久平和」の実現に向かって私も「微力であっても、決して無力ではない」と信じて、平和な明日を築く力になりたいと思う人と共に声を大にして、力を尽くしていきます。

「原子爆弾の恐ろしさ」

古ヶ崎中学校 1年 相馬 理子

「のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。」

これは、あの日、1945年8月9日午前11時2分に落とされた原子爆弾によって被害にあった少女が書いたものです。私は平和の泉でこれを読んで、原子爆弾が恐ろしいものなのだと改めて思いました。

私は平和大使として長崎に行くまでは、原子爆弾は恐ろしいものだけしか考えていませんでした。しかし、原爆資料館でファットマンの威力はどのくらいだったのかや、人体への被害や影響がどのくらいひどかったのかを学び、74年前祖父が生まれた時代にこのようなことが現実にあったと思うと怖くなりました。

私が心に残ったのは、実際に被害にあった築城昭平さんのお話です。築城さんは、被爆当時は18歳でした。この頃は大人の男性が戦場に行って戦っているのに、女性や小さい子どもは、日本は正義の戦争をしていると信じて毎日働いていました。築城さんも、軍需工場へ学徒動員され、爆心地から1.8キロメートルの学校の寮で、当日の夜勤に備え、寝ている時に被爆しました。布団を頭までかぶっていると、突然体が吹き飛ばされて、全身に火傷を負いました。特に、左腕と左足の先に重い火傷を負ったそうです。築城さん

は、この恐ろしいことがまた現実にならないようにたくさんの人に伝え、二度と戦争を繰り返さないでほしいと言っていました。

しかし、世界には、まだ戦争をしている国があり、核兵器が13,880発存在します。もし、戦争が起こり、この核兵器が使われたら、人類は滅亡してしまうと思います。

私はこの恐ろしい原子爆弾をはじめとする核兵器を使った戦争が二度と起こらないように核兵器廃絶を呼びかけ、原子爆弾は恐ろしいものだということを家族や友達に教えたいと思います。そして、これからも平和な世界が続くことを願います。

「日本を最初で最後の被爆国に」

古ヶ崎中学校 2年 高橋 柚希乃

1945年8月9日、長崎にたった一つの原子爆弾が落とされました。一瞬にして街は破壊され、人々の生活が奪われました。その場で生き残った人も、後遺症に苦しんだり、精神的にも苦しんだりしました。私は、平和大使として長崎へ行き、被害の大きさ、原爆のすさまじさ、そして、平和の尊さを学ぶことができました。また、四日間を通して私なりの平和を考えることができました。それは「一人ひとりが思いやる心を持つ」です。長崎へ行く前までは、平和とは単純に「戦争をしないことだ」と思っていました。しかし、四日間を通して平和に対するイメージが変わりました。イメージが変わった理由は、被爆した方のお話を聞いたからです。

被爆した方はこうおっしゃっていました。「本当の平和のために今の日本に求めることは、核の恐ろしさを世界に伝えることだ」と。私は、原爆資料館を見学しました。そこには、思わず目を背けたくなるような写真がたくさんありました。火傷によって、皮膚がただれた女の子、水を求め、川に来た人が亡くなっている絵。これらの写真や絵を見て、改めて原爆のすさまじさを知りました。写真や絵でさえ恐ろしいのに、その場にいて被爆した方の気持ちを想像すると胸が痛みます。しかし「本当は目を背けてはいけない。この事実を一人でも多くの人に伝えるべきだ」と被爆した方の話を聞いて思いました。

今、こうして学校に行くことができ、毎日ご飯を食べることができるのは、当たり前ではありません。毎日生きていることに感謝しなければならないということに気付かされた四日間でした。

世界には、まだ核兵器を保有している国がたくさんあります。もう二度と、あのような苦しみを味わうことがないように、まずは戦争や核兵器の恐ろしさを国のリーダーに知ってもらう必要があると思います。しかし、国のリーダーに直接伝えることは難しいため、私ができることは身近な家族や友人に伝えることで、長崎や広島に原爆が落ちたという「事実」だけで終わらせないようにすることだと思いました。私は、日本が最初で最後の被爆国になるようにしていきたいです。

「原爆とは」

牧野原中学校 3年 猪瀬 響樹

私は、8月7日から10日まで平和大使として長崎に行き、勉強になったことや印象に残ったことが三つあります。

一つ目は、被爆された築城昭平さんのお話です。築城さんは、学校の寮で寝ている時に原爆を落とされました。光ったと同時に吹き飛ばされて気が付いた時には、辺り一面何も無くなり、全身が真っ赤で血だらけになってしまっている人や口がどこにあるか分からない人、火傷で皮膚がただれてしまっている人が辺りにたくさんいたという話を聞いて、とても悲しく苦しい気持ちになりました。また、助けに来た人たちも残留放射線により被爆し、一ヶ月から二ヶ月ほどで亡くなってしまったという話が印象に残りました。

二つ目は、吉田勝二さんの言葉です。「平和の原点は、人の痛みが分かる心を持つ事」私は、この言葉はとても重みのあるものだと思います。

三つ目は、原爆について学べたことです。私は、最初長崎と広島に落とされた原爆は一緒だと思っていました。しかし、実際は長崎に落とされたファットマンの方が広島に落とされたリトルボーイより火薬量が六千トンも多く、核分裂物質も長崎は、プルトニウム239で広島は、ウラン235と異なることが分かりました。長崎に落ちた原爆は、広島より威力が大きかったにもかかわらず、周りが山に囲まれていたため、被害は広島より小さかったそうです。現在の核兵器保有国はロシア・アメリカ・フランスなど9カ国あ

ります。この国々が戦争などにより核兵器を使用した場合、地球上のすべての生物が亡くなる可能性があると言われ、本当に恐ろしい兵器だと改めて思いました。そのために、政治家たちがもっと真剣に話し合い核兵器禁止条約への署名をするべきだと思いました。

私は、唯一の被爆国に生まれた者として原爆の恐ろしさと絶対に戦争をしてはならないことを伝えていきたいと思えます。

「本当の“平和”とは」

根木内中学校 1年 澁谷 亜依

私は、今回、この平和大使長崎派遣で、いろいろなことを学びました。4年前に私は、長崎に投下された原爆について調べました。家族皆で長崎に行き、原爆資料館を見て回りました。当時、幼かった私は、11時2分で止まったままの時計や真っ黒こげになったお弁当箱、ボロボロになった服、溶けたガラスの瓶、ケロイドの模型などを見て、衝撃を受けました。原爆が投下されたあの日、長崎は一瞬にして焼けてしまったのだ、と。信じられないし、信じたくありませんでした。あの日、長崎で何が起こったのだろう…。すごく興味を持ちました。そして、4年経った今、もう一度詳しく調べたくて、この平和大使長崎派遣に応募しました。

1945年8月9日、11時2分、長崎の地は、約3000～4000度という温度にもなったと言われています。被爆した人は、皆、水をほしがりました。しかし、当時、被爆した人に水を飲ませると飲んだ人は死ぬと言われていたので、皆、水をもらえず、苦しみながら亡くなっていきました。熱くて苦しいのに水がもらえない。どれほど苦しいものだったのでしょうか。そのようなことを考えるだけで胸が痛くなります。そして、長崎では、被爆者の築城昭平さんの被爆体験講話を聞くという、とても貴重な体験をすることができました。被爆者の方々の話を聞けるのは、私たちが最後の世代だ、と言われています。築城さんは、被爆当時18歳でその日は夜勤のために寝

ていました。築城さんは、いつも空襲に備えて、布団をすっぽりかぶって寝たそうです。もし、布団をかぶっていなかったら、死んでいたかもしれないと言っていました。当時、長崎の人たちは、広島に原爆が落とされたことを知らされず、築城さんは、最初自分が寝ている隣の部屋に爆弾が落とされたと思ったそうです。しかし、外に出てみたら、昼間とは思えないほど真っ暗で、辺りは静まり返り、霧がかかっているようだったそうです。防空壕に行くと、皮膚がはがれ、血だらけで、皆真っ赤でした。頭や手足がない人や顔がどこにあるのか分からなくて、前も後ろも分からないようなひどい状態の人、真っ黒こげの死体など、地獄そのものだったそうです。その後も、原爆症によって、たくさんの方が亡くなりました。築城さんは、原爆の恐ろしさを世界の人々に知ってもらいたいと言っていました。だから私も、家族や友人に原爆のことを伝えていきたいと思います。

この世界には、原子爆弾が13,880発あると言われていています。これが全部使われたらどうなるのでしょうか。地球は滅びると思います。私は、この世界から原爆がなくなることを願います。世界には、まだ戦争をしている国がたくさんあります。しかし、考えてみてください。ある日、一発の原爆で家族や友人、大切な人を失ってしまったら。これから一人で、生きていくことになったら。今までの生活が全てなくなってしまうたら。それくらい原爆は、恐ろしいもののためあってはならないものです。次は、私たちが原爆について語り継いでいきます。次の世代へ、また次の世代へと。私は、この世界から、原爆がなくなることをいつまでもいつまでも願い続けます。

「長崎派遣を通して」

河原塚中学校 3年 蒔野 拓朗

僕は、平和大使として長崎へ行って、特に印象に残ったことが二つあります。

一つ目は原子爆弾の恐ろしさについてです。1945年8月9日、11時2分、一つの原子爆弾で7万4千もの人が一瞬にして亡くなり、放射線による原爆症で苦しむ人が今もなおいます。そして、世界に核兵器を持つ国があることで不安になっている人もいます。そのために、核兵器がなくなることを願って今僕にできることをやりたいと思いました。

二つ目は、青少年ピースフォーラムで、被爆体験講話を聞いたことです。僕は今の自分の生活と比較しつつ、話を想像しながら聞きました。その方は、睡眠中に被爆されましたが、布団を被っていたおかげで生き残ることができました。全身に火傷を負い、特に左腕と左足は重傷だったそうです。被爆した人は、次々と倒れていきました。そのような所に、もし自分がいることを考えたら、言葉では言い表せないほどの辛さだと思います。それにもかかわらず、被爆者の方がこのような場で話してくれたのは、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さを次の世代に忘れてほしくないという思いからだと思います。

今回僕は、平和大使長崎派遣で学んだことを家族や友達に伝えていきたいと思います。

「平和な社会に向けて」

新松戸南中学校 2年 佐藤 達弥

今回長崎で過ごした四日間で、原爆が投下された時の様子について、より深く知ることができました。

初日から二日目にかけて防空壕や爆心地、城山小学校など被爆の爪痕が残る場所をいくつか回りましたが、中でも一番印象に残ったのは原爆資料館です。被爆で亡くなった人が身に付けていた血がついたままの破れた衣服、溶けて大きく変形したガラス瓶、原爆が投下された時の状況を表したジオラマなど、痛々しい資料が多く、その中でも入口付近に展示されていた原爆が投下された時間である11時2分を示したままの時計からは、原爆投下の瞬間のすさまじさが74年経った今でも伝わってきました。

また、二日目に僕たちの案内をしてくださったガイドの方が言っていた「戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである。」という言葉が、とても強く印象に残りました。実際勝敗のために平然と人々の命が奪われていたことを考えると、とても恐ろしい話です。この一言で、平和の大切さをより感じました。

二日目と三日目の午後は青少年ピースフォーラムに、三日目の午前には平和祈念式典に参加しました。これらに参加して見えてきたのは、人々の平和に対する思いです。

ピースフォーラムで最初に被爆者の築城さんの話を聞き、被爆したときの

惨状を学びました。また、築城さんは「世界中に大量の原爆があることについてどう思うか」という質問に対し「国連で核兵器を管理し、どの国も核兵器を持たないよう条約を整備し実行すべき」と回答するなど、自ら平和や核兵器廃絶に向けた最善策を模索されていました。

今回の長崎派遣で戦争や平和について多くのことを学ぶことができましたが、僕はただ学ぶだけでは意味がないと思います。学んだことを周りに発信し、実行に移して初めて意味が生まれると思います。まずは、周囲に気を遣うなど、日常の小さなことから始め、今回学んだことを役立てたいと思います。

「平和について」

金ヶ作中学校 1年 清水 啓乃介

戦争、原爆。これまでの僕は、これらのことを教科書に載っている歴史上の悲惨な出来事として、ぼんやりと心の中にあるだけでした。

しかし、今回、平和大使として長崎に行き、原爆落下中心地や一本鳥居などの戦争遺跡や原爆資料館を見学し、青少年ピースフォーラムで、被爆者の方の貴重なお話を聞くにつれて、僕の中で戦争や原爆への考え方が変わっていきました。もっと深く知りたいと思うようになりました。

現地で自分の目で見て感じたり、被爆者の方のお話を直接聞いたりすることは、教科書や映像で見ることは心への響き方が違いました。特に、被爆者の方のお話は、当時の人々の苦しみが伝わってきて、心がズシンと重くなりました。

戦争を経験するということは、一生苦しんで生きていくということです。「もう二度と戦争を起こしてはならない。」僕はそう思いました。

平和祈念式典での長崎市長による「長崎平和宣言」の中で、このような言葉がありました。

「私たち一人ひとりの力は、微力ではあっても、決して無力ではないのです。」

僕は、この言葉に勇気づけられました。

今回参加した「青少年ピースフォーラム」では、大学生などのボランティ

アの方々が活躍していました。平和を願う若い人たちが、こんなにもいることに驚きました。

僕は平和について、今回、初めて真剣に考えました。どうすれば、平和になるのだろうか。きっと、争い事にならないためには、相手を思いやる気持ちを忘れずにいること、そして、人の気持ちを受け止めることが大切だ、と思いました。

今年で原爆が投下されてから、74年が経ちました。被爆者の方の平均年齢は82歳を超えています。僕たちは、その方々から直接話が聞ける最後の世代だと言われています。僕は、今回貴重なお話を聞くことができ、意識が変わりました。若い人たちが、もっと戦争について知ることが、平和への第一歩だと思いました。

「平和大使として私ができること」

和名ヶ谷中学校 2年 松本 虎太郎

私がこの平和大使長崎派遣事業に参加した理由は、姉が一昨年に参加していたことと、曾祖父が長崎で被爆したことを母や祖母から聞いていて興味があったからです。

母からは姉と同じように8月9日に長崎に行って肌で感じて来てほしいと言われました。

8月9日の原爆の日、曾祖父母の住んでいた島原半島にある深江町でも原爆が落とされたときは、窓ガラスが割れるなどの被害があったそうです。

曾祖父は二日後召集され、どこに連れていかれるのかわからないまま、電車に乗り、長崎に着くと、私が本や原爆資料館で見てきたような惨状を目の当たりにしたそうです。全身が黒焦げになった死体や、全身大火傷で指先から皮膚が垂れ下がっている人など。そこで、曾祖父は死体処理などをしましたが、配給でもらったおにぎりには、ウジやハエが湧いていて思わず投げ捨ててしまったそうです。

死体処理を終え、家に帰った途端に倒れ、高熱が出て全身の毛が抜け落ち、原爆症で苦しんだそうです。

幸い曾祖父は助かりましたが、原爆より恐ろしいものは無いと言っていたと聞きました。

原爆資料館には、爆風や熱線、放射線による被害がよくわかる資料がたく

さんあり、私は無我夢中で写真を撮り続けていました。

長崎の原爆遺構を見学して、一番心に残ったのは山王神社の一本鳥居でした。爆風で片側が吹き飛ばされ、片側一本だけ残っている鳥居を見て、爆風の強さに、私は思わず身震いしてしまいました。

現在の長崎の街並みは、とてもきれいで74年前に原爆で焼け野原になった場所とは思えませんでした。しかし、たった一発で一つの都市を壊滅させる原子爆弾は許されるものではありません。

長崎にいた人の命を一瞬で奪うだけでなく、かろうじて生き残った人たちや、曾祖父のように救護や死体処理に来た人をも苦しませた原爆は、人間が人間に対して使うものとは私には到底思えません。

私ができることは、長崎派遣を通じて学んだことを、母や祖母が曾祖父の体験したことを、私に伝えてくれたように、周りの人に伝えていくことだと思います。

「長崎で学んだこと」

旭町中学校 1年 小川 陽翔

平和大使として長崎に3泊4日派遣され、たくさんのことを学んできました。

その一つとして、被爆者の方から直接話を伺うことができました。今から74年前の1945年8月9日、午前11時2分、長崎に原子爆弾が投下されました。その原子爆弾はファットマンと言われ、甚大な被害をもたらしました。空がピカッと光り、一瞬にして数千度の熱により辺り一面焼け野原になり、たくさんの方が亡くなりました。また、かろうじて生き残ったとしても、水を求めて川に飛び込み亡くなる人もいて、浦上川は川の水が見えないくらい死体の山だったそうです。

原爆資料館では、実際の映像や資料を見学しました。火傷を負い皮膚がただれてしまっている人、一瞬で性別が分からないくらい黒焦げになり亡くなっている人、骨になってしまった人の写真など、言葉に表せないほど残酷な資料ばかりでした。生き残った人が亡くなってしまった家族を懸命に探している写真を見て、とても悲しくなり涙が出てしまいました。そして、いまだ放射線の被害で苦しんでいる人がいることを知りました。

青少年ピースフォーラムでは、被爆者の方が思い出したくない記憶を、次の世代に語り継いでほしいとの思いから、直接私たちに話してくれました。

僕は「二度と戦争を起こしてはいけない。74年前の広島と長崎の被爆地

で最後にしたい。」と思い、勉強しました。僕は、この長崎で、実際に目で見て、聞いて、体感して、戦争の恐ろしさを学びました。原子爆弾が一発にしてたくさんの命を奪う核兵器であること。今勉強できることがどれだけ幸せなことかなど。

まだ世界には、核兵器を保持している国がたくさんあります。被爆者の方は世界から核兵器が一つもなくなるまで、安心して死ぬことができないと話していました。被爆者の平均年齢は、82歳を超えています。これから、戦争を知らない人たちが増えていくので、僕たち平和大使が戦争の悲惨さ、恐ろしさを語り継いでいきたいと思います。このような機会を与えていただき、たくさんのことを経験することができたことに、感謝しています。ありがとうございました。

「本当の平和」

小金北中学校 2年 八木原 弓賀

私は、今まで戦争のことを深く考えたことがありませんでした。長崎に原子爆弾が投下された日さえ知りませんでした。しかし、今回の「平和大使長崎派遣」に参加したことで戦争の残酷さ、原爆の威力、そして原爆が罪のない人々の命を奪ったことなど、たくさんを知ることができました。

1945年8月9日、午前11時2分、突如長崎の街の上空で原子爆弾(通称「ファットマン」)が炸裂しました。12月末までに死者73,884人、負傷者74,909人と推定され、長崎の人々に多大なる被害をもたらしました。原爆による被害は熱線、爆風、放射線による三種類に分けられます。熱線による被害では、皮膚が焼けただれ剥がれ落ち、肉や骨が露出するなど普通の火傷では考えられないほど酷いものでした。爆風による被害では、建物はほぼ破壊され、人々は吹き飛ばされ、散弾のような無数のガラス片が人々を襲いました。放射線による被害では、人々の身体の細胞を壊していき髪の毛が抜け落ちてしまったり、ガンを発症したりする原爆症を人々に残しました。私が実際に訪れた原爆資料館には、当時の悲惨さを物語っている資料がたくさんありました。その中でも、一番印象に残っているものは「永遠の11時2分」と呼ばれる原爆が投下された時刻で止まっている柱時計です。この時計を見た時、本当に11時2分に原爆がこの地に落とされたのだと初めて実感することができました。そして、私が参列した「長崎原爆犠牲者慰

「長崎平和祈念式典」で印象的だった言葉があります。それは「幾千の人の手足がふきとび 腹わたが流れ出て 人の体にうじ虫がわいた 息のある者は肉親をさがしもとめて 死がいを見つけ そして焼いた」これは、長崎平和宣言の中で読み上げられた、実際に17歳の時に原子爆弾により家族を失い、自らも大けがを負った女性がつづった詩です。この詩を聞いた時、被爆された方々はどんなに辛く惨めな思いをして生きてきたのかと思い、とても胸が痛くなりました。みなさんは想像できますか。自分の家族や生活を失い自分の肌が焼けただれた悲惨な姿を…。私には想像できませんでした。

今回長崎へ派遣されたことは、私にとって、とても貴重な経験になりました。これから被爆者の方から、直接お話を伺える機会が少なくなってくると思います。だからこそ、まず私が身近な家族や友達に、原爆の悲惨さ、そして平和の尊さを伝えていきたいと思います。

「平和への一歩」

聖徳大学附属女子中学校 2年 西川 叶美

8月9日、長崎の街に原子爆弾が落とされてから74年が経った。その期間の中で私たちは、どのくらい被爆者の方々の思いや願いを実現できたのだろうか。きっと望んでいる未来はまだ遠いだろう。

私は今回の「平和大使長崎派遣」を通して、平和案内人の方や被爆者の方からお話を聞き、原爆について深く知ることができた。

長崎に投下された原子爆弾は、長さ3.25メートル、直径1.52メートル、重さが4.5トンあり、ファットマンと呼ばれている。上空500メートルで爆発し、爆風は秒速440メートルの速さだった。落下した時の地表の温度は三千から四千度にも上り、太陽と同じくらいの熱さにもなった。原爆による被害は三つに分けられる。爆風、熱線、そして最も被爆者を苦しめたとされる放射線である。爆風は人々を吹き飛ばし、無数の破片を浴びせる。熱線は一瞬で人の身体を炭のようにしてしまう。放射線は原爆が投下された時だけでなく、生き延びた被爆者までも苦しめてしまう。脱毛、白血病、がんなどの影響を与えるため、当時は差別を受けていたという。

私は、核兵器が人々に被害を与えていた事実を、全世界に発信していくべきだと思う。なぜなら、現在世界での核弾頭の保有数は、13,880発もあり、主にロシアやアメリカでの保有数が多いからだ。威力のある核兵器を持つことで、自分の国の安全を保つ、抑止力という考え方があるために手放

そうとしないのだ。しかし、今あるすべての核兵器を使えば、この世界は滅びてしまうだろう。この世界が壊れてしまう前に、私たちは何かしらの行動を起こすべきだ。私たちには何ができるのか。考えることが平和への一歩になるはずだ。

「平和への思い 時代をこえて」

専修大学松戸中学校 1年 江本 彩乃

私は松戸市の平和大使として、長崎を訪問し、戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさや平和の尊さについて被爆者の方や平和案内人の貴重なお話と被爆遺構や原爆資料館の見学を通して経験し学びました。

私は、当時の様子が書かれた防空壕のパネルの一文に目を奪われました。『肉が黒焦げになり、舌が飛び出し、眼球と歯は大きな圧力が加えられたかのように押しつぶされていた。』この文章を読んだ私は、あまりに残酷すぎてその場から目を背けたくなるほど辛く、悲しい気持ちになりました。

被爆体験講話で、築城昭平さんから話を伺いました。築城さんは被爆当時18歳でした。爆心地から1.8キロメートルの学校の寮で、夜勤に備え睡眠中に被爆され、全身火傷を負いました。そして、左腕には今も傷跡が残っています。築城さんが見た光景は、全身火傷を負い、ぼろ雑巾のようにただれた皮を引きずりながら助けを求める人々や誰だか分からないほど真っ黒焦げになった遺体が散乱し、人間の身体と思えないほど無残な姿だったそうです。「心から悲しいと思っているのに、自分でも不思議なくらい何故か涙が出なかった。」と仰っていました。そして、隣で寝ていた友達と二人で家の外に出るとシーンと静まり返っていて、地球上で二人だけが取り残されたような孤独感を強く感じたことを今でも鮮明に覚えているそうです。その話を聞いた私は、大きな衝撃を受け、心が痛みました。

被爆者の方は、放射線被害による後遺症に苦しむだけではなく、差別され、身体だけでなく、今も癒えることがない心の傷を抱えていることを知りました。

築城さんは「もっと世界で原爆について考えてほしいと願うと共に、平和であることに感謝し、常に関心を持ち続けてほしい。」と私たちに強く訴えました。

そこで私は、被爆者の方々のお話を未来へ語り継ぎ、二度とこのような過ちを犯してはいけないと思いました。そのためにも私ができることは、家族や友達、身近な人たちに戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさを伝え、知ってもらうことによって、平和の大切さについて考える機会を持ってもらうことです。そして、いつか核兵器にかかわる問題が国連や各国での話し合いにより、解決され、世界の恒久平和、核兵器廃絶への一步になることを願っています。

私は、平和大使としての使命である平和啓発を一人でも多くの人たちに広め、争いのない平穏な毎日を送れることがいかに幸せかを伝え続けたいと思います。

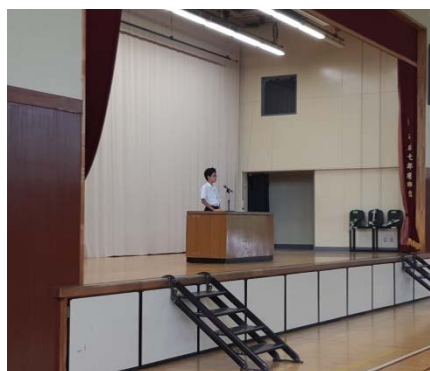
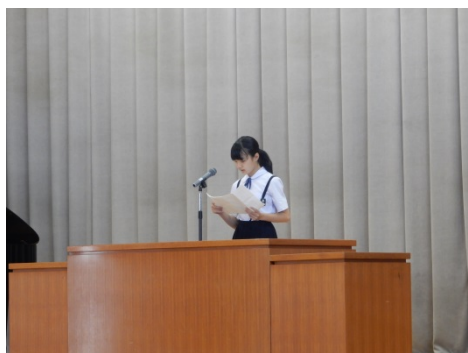
派遣後の活動について



※学校から提供いただいた資料の一部を載せています

• 発表

第三中学校 小川 ひなた
令和元年9月2日（月）
2学期始業式にて発表



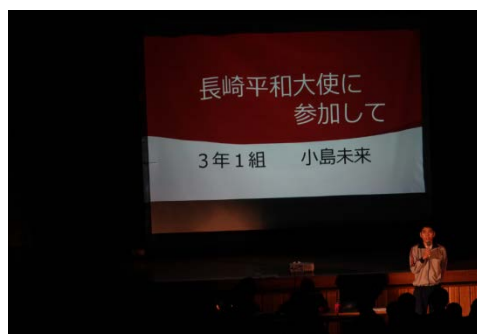
和名ヶ谷中学校 松本 虎太郎
令和元年9月2日（月）
2学期始業式にて発表

旭町中学校 小川 陽翔
令和元年9月2日（月）
2学期始業式にて発表



小金北中学校 八木原 弓賀
令和元年9月2日（月）
2学期始業式にて発表

金ヶ作中学校 清水 啓乃介
令和元年9月13日(金)
文化祭にて発表



第四中学校 小島 未来
令和元年10月24日(木)
文化祭にて発表

小金中学校 小林 大起
令和元年10月25日(金)
文化祭にて発表



聖徳大学附属女子中学校
西川 叶美
令和元年11月2日(土)
高校生の体験発表会にて発表

・学校（学年）だより

第一中学校 藤井 星空
学校だより（9月号）

松戸市立第一中学校 令和元年9月5日 NO.5



学校だより

～ We are 一中 ～

【学校教育目標】 ○健康な生徒 ○自ら学ぶ生徒 ○心豊かな生徒

長崎平和大使 平和大使長崎派遣の事業は、松戸市が世界平和都市宣言に基づき、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集するものです。本校では3年生の藤井星空さんが参加しました。（以下本人の感想です。）

「私は8月7日から10日まで一中代表として長崎へ行きました。小学生の頃に広島に行ったことがありますが、その時は怖くて目を背けてしまった原爆の惨状が展示されてありました。長崎に行き、平和という言葉が簡単につかわれがちですが、とても難しいことであると改めて理解しました。本当に平和な世界にするには、長く険しい道のりがあります。そのためにも、私たち一人一人が、戦争や原爆のことを知り考えることが大切です。今回の派遣で戦争や原爆の悲惨さを知った私は、これからも、『戦争がおきないようにするためには、平和を保つためには』を考えてきたいと思いました。」

栗ヶ沢中学校 小川 新九郎
学校だより9月号

松戸市立栗ヶ沢中学校
学校だより9月号
令和元年 9月12日発行

栗の実



2学期のキーワードは「学習」と「挨拶」

<夏休みの活躍>

長崎平和大使 小川新九郎くん

僕は、長崎で「平和」について学んできました。被爆者の方の話を直接聞いて、今の生活ができていくことに、感謝をしなければいけないと感じました。また、原爆の悲惨さについて学びました。原爆資料館で、ファットマンの原寸大模型を見ました。なんと、核心の大きさはソフトボール大でした。資料だけではわからないような小さなことまで、いろいろ学ぶことができました。この体験を通して、戦争と原爆について深く考える機会となりました。この貴重な体験を語りついでいきたいです。

根木内中学校 澁谷 亜依
学年だより (12月号)



松戸市では、恒久的な平和を願い、昭和60年に「世界平和都市宣言」をしました。「世界平和都市宣言」に基づき、21世紀を担う中学生に戦争や核兵器の無い平和な未来を築く心を育んでもらうため、平成20年度から毎年市内中学生を長崎市に「平和大使」として派遣しています。今年度は、澁谷亜依さんが選ばれ、活動しました。

平和大使の役割

- 1: 松戸市「世界平和都市宣言」を知る。
- 2: 松戸市の平和スローガンである「みんなで築こう世界の平和」という心を持つ。
- 3: 平和への願いを込めた千羽鶴を作製して、長崎に献呈する。
- 4: 長崎を訪問するにあたって「原爆とはどんな兵器なのか」「戦争がどんなに悲惨なものなのか」などを学び、平和の大切さを認識する。
- 5: 長崎市では「青少年ピースフォーラム」に参加して、全国の自治体及び地元長崎の青少年たちと一緒に平和について学び、語り合う。
- 6: 長崎訪問終了後、感想や記録をまとめて報告する。
- 7: 長崎訪問で経験したこと、思ったことなどを家族や友達などに伝えていく。

天に向けてた右手は原爆の「脅威」を、水平に伸ばした左手は「平和」を、横にした右足は原爆投下直後の長崎市の「静けさ」を、立てた左足は救った「命」を表し、軽く閉じた目は戦争犠牲者の「哀極」を折って

4年前、私は長崎の原爆について調べていました。家族で長崎に行き、原爆資料館を見て回りました。当時幼かった私は、『11時2分で止まった時計』や『ケロイド(皮膚線維増殖性疾患)の模型』、『溶けたガラス瓶』などを見て、衝撃を受けました。

「あの日、長崎は一瞬で焼けてしまったんだ…」と。

信じられないし、信じたくありませんでした。4年経った今、もう一度詳しく調べたくて、この長崎派遣大使に参加しました。



派遣大使の人達は、みんなすごく優しく、すぐに仲良くなることができました。長崎の人達とも仲良くなって、沖繩の人、山口の人などたくさんの人と仲良くなりました。平和の鐘を鳴らした時「ありがとう。」と原爆被害者の遺族の方に言われました。「原爆の事を伝えて欲しい。」「たくさんの人に知って欲しい。」、そう言われました。

私が見た長崎の空は、とてもきれいでした。雲一つない青空でした。そんな長崎は、今も原爆の被害は続いています。白血病に苦しんでいる方がたくさんいます。今、世界には原爆が14450個あります。これが全て使われたら、どうなるでしょう。地球は滅びてしまいます。

だから私は、この世界から原爆がなくなることを願います。今でも戦争をしている国がたくさんあります。考えてみて欲しいです。ある日、突然家族がいなくなってしまうたら。

これから、この土地に一人で生きていくことになったら。それぐらい原爆は怖いもので、あってはならないものです。



『本当の平和』って何だろう？

笑ってられること？毎日おいしいご飯が食べられること？学校に行けること？幸せと思えること？私はこれからも、この『答え』を探し続けます。

澁谷 亜依

新聞記事

令和元年8月20日（火）発行
朝日れすか 9月号（帰庁報告会）

長崎訪問の中学生大使 平和の尊さ「伝えたい」 松戸 帰庁報告

松戸市の「平和大使長崎派遣」事業で、市内の中学生22人が8月7～10日、長崎市を訪れ、青少年ピースフォーラムなどに参加した。10日に帰庁報告会があり、被爆地で学んだことや感じたことを一人



長崎に派遣された平和大使の中学生=8月10日、松戸市役所

ずつ発表した。同事業は2008年度に始まり、今年度で12回目。21校51人から応募があり、男子10人、女子12人が平和大使に任命された。

現地では、被爆建造物や原爆資料館などを見学し、核兵器の恐ろしさを見学した。74回目の原爆の日を迎えた9日には、平和祈念式典に参列。犠牲者の冥福を祈り、黙とうを捧げた。

青少年ピースフォーラムは平和学習などを通して、平和に対する理解を深めてもらうのが目的。全国から参加した同世代の人たちと「戦争と平和」について話し合った。

帰庁報告会で、和名ヶ谷中2年の松本虎太郎君は「長崎に行く前から、母や祖母に原爆のことを聞いていた」と話し始めた。母方の祖母が長崎県南島原市深江町生まれという。「爆心地近くの被害状況を詳しく知りたくて」応募したといい、「原爆資料館では無我夢中で写真を撮った」そうだった。2歳違いの姉、歌子さん（高1）も一昨年、中学2年で平和大使を務めた。

市は10月6日に「平和の集い」を開く。その中で、平和大使の中学生が長崎で体験したことを報告する。

長崎平和宣言



長崎平和宣言

目を閉じて聴いてください。

幾千の人の手足がふきとび
腸わたが流れ出て
人の体にうじ虫がわいた
息ある者は肉親をさがしもとめて
死がいを見つけ そして焼いた
人間を焼く煙が立ちのぼり
罪なき人の血が流れて浦上川を赤くそめた

ケロイドだけを残してやっと戦争が終わった

だけど……
父も母も もういない
兄も妹ももどってはこない

人は忘れやすく弱いものだから
あやまちをくり返す
だけど……
このことだけは忘れてはならない
このことだけはくり返してはならない
どんなことがあっても……

これは、1945年8月9日午前11時2分、17歳の時に原子爆弾により家族を失い、自らも大けがを負った女性がつづった詩です。自分だけではなく、世界の誰にも、二度とこの経験をさせてはならない、という強い思いが、そこにはあります。

原爆は「人の手」によってつくられ、「人の上」に落とされました。だからこそ「人の意志」によって、無くすことができます。そして、その意志が生まれる場所は、間違いなく、私たち一人ひとりの心の中です。

今、核兵器を巡る世界情勢はとても危険な状況です。核兵器は役に立つと平然と公言する風潮が再びはびこり始め、アメリカは小型でより使いやすい核兵器の開発を打ち出しました。ロシアは、新型核兵器の開発と配備を表明しました。そのうえ、冷戦時代の軍拡競争を終わらせた中距離核戦力（INF）全廃条約は否定され、戦略核兵器を削減する条約（新START）の継続も危機に瀕しています。世界から核兵器をなくそうと積み重ねてきた人類の努力の成果が次々と壊され、核兵器が使われる危険性が高まっています。

核兵器がもたらす生き地獄を「くり返してはならない」という被爆者の必死の思いが世界に届くことはないのでしょうか。

そうではありません。国連にも、多くの国の政府や自治体にも、何よりも被爆者をはじめとする市民社会にも、同じ思いを持ち、声を上げている人たちは大勢います。

そして、小さな声の集まりである市民社会の力は、これまでも、世界を動かしてきました。1954年のビキニ環礁での水爆実験を機に世界中に広がった反核運動は、やがて核実験の禁止条約を生み出しました。一昨年の核兵器禁止条約の成立にも市民社会の力が大きな役割を果たしました。私たち一人ひとりの力は、微力ではあっても、決して無力ではないのです。

世界の市民社会の皆さんに呼びかけます。

戦争体験や被爆体験を語り継ぎましょう。戦争が何をもたらしたのかを知ることは、平和をつくる大切な第一歩です。

国を超えて人と人との間に信頼関係をつくり続けましょう。小さな信頼を積み重ねることは、国同士の不信感による戦争を防ぐ力にもなります。

人の痛みがわかることの大切さを子どもたちに伝え続けましょう。それは子どもたちの心に平和の種を植えることになります。

平和のためにできることはたくさんあります。あきらめずに、そして無関心にならずに、地道に「平和の文化」を育て続けましょう。そして、核兵器はいらない、と声を上げましょう。それは、小さな私たち一人ひとりにできる大きな役割だと思います。

すべての国のリーダーの皆さん。被爆地を訪れ、原子雲の下で何が起こったのかを見て、聴いて、感じてください。そして、核兵器がいかに非人道的な兵器なのか、心に焼き付けてください。

核保有国のリーダーの皆さん。核不拡散条約（NPT）は、来年、成立からちょうど50年を迎えます。核兵器をなくすことを約束し、その義務を負ったこの条約の意味を、すべての核保有国はもう一度思い出すべきです。特にアメリカとロシアには、核超大国の責任として、核兵器を大幅に削減する具体的道筋を、世界に示すことを求めます。

日本政府に訴えます。日本は今、核兵器禁止条約に背を向けています。唯一の戦争被爆国の責任として、一刻も早く核兵器禁止条約に署名、批准してください。そのためにも朝鮮半島非核化の動きを捉え、「核の傘」ではなく、「非核の傘」となる北東アジア非核兵器地帯の検討を始めてください。そして何よりも「戦争をしない」という決意を込めた日本国憲法の平和の理念の堅持と、それを世界に広げるリーダーシップを発揮することを求めます。

被爆者の平均年齢は既に82歳を超えています。日本政府には、高齢化する被爆者のさらなる援護の充実と、今も被爆者と認定されていない被爆体験者の救済を求めます。

長崎は、核の被害を体験したまちとして、原発事故から8年が経過した今も放射能汚染の影響で苦しんでいる福島の人々を変わらず応援していきます。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げ、長崎は広島とともに、そして平和を築く力になりたいと思うすべての人たちと力を合わせて、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2019年（令和元年）8月9日

長崎市長 **田 上 富 久**

以下、長崎平和宣言（ことばの解説）から抜粋

1. 中距離核戦力（INF）全廃条約

射程500キロから5,500キロの地上配備型ミサイルを禁じるこの条約は、冷戦時代の1987（昭和62）年にアメリカと旧ソ連との間で結ばれた、歴史上初めて核兵器の削減・廃棄を実現した条約です。この条約によって、米ソは全ての中距離核ミサイルを破棄し、冷戦終結のきっかけとなりました。しかし、アメリカとロシアの両国は、お互いに相手が条約違反を犯していると主張し、この条約からの離脱を表明しました。

2. 戦略核兵器を削減する条約（新START）

2009（平成21）年12月に失効した、「第1次戦略兵器削減条約（START I）」の後継条約として、アメリカとロシアの間で、2010（平成22）年に調印、2011（平成23）年に発効された条約。

この条約では、発効後7年以内に、それぞれ核弾頭及びその運搬手段の削減等を規定しています。2018（平成30）年に両国ともに削減目標の達成を宣言しましたが、条約が失効する2021（令和3）年までに後継条約を締結する必要があります。両国が合意すれば条約を5年延長することが可能です。

3. 市民社会

近年、貧困、人権、環境、軍縮といった地球規模の課題において、NGO（非政府組織）やNPO（非営利組織）、民間財団などの市民の組織が大きな役割を果たしており、こうした組織

が公共を担う社会を「市民社会」といいます。

「市民社会」は政府や企業と並び、社会を構成する重要な要素です。政府や企業に対して情報を提供したり、活発な社会的運動を行ったりすることで、人々に関心を与え、時には国際社会に大きな影響を与えます。

核兵器の禁止や廃絶に向けた動きにおいても、国内外の市民社会組織が大きな役割を果たしています。今後ますます市民社会の役割は重要となり、市民社会を構成する私たち一人ひとりが声を上げ、行動することが大切です。

4. ビキニ環礁での水爆実験

1954（昭和29）年3月1日、マーシャル諸島のビキニ環礁で大規模な水爆実験が行われ、近海で操業中だった静岡県のマグロ漁船第五福竜丸が「死の灰」を浴びました。乗員23名はすべて被ばくし、久保山愛吉無線長（当時40歳）が約半年後に亡くなりました。この事件は国民に強い衝撃を与え、原水爆禁止運動発展の契機となりました。

5. 核兵器禁止条約

核兵器は一旦使用されれば、取返しのつかない甚大な被害を人間や環境に与えます。それは戦争での使用だけでなく、核兵器が存在する限り、誤って使われたり、テロなどに使われたりする危険性があります。NPT（6で解説）で約束された核軍縮が進まない状況に不満を持つ国々の間で、核兵器を法的に禁止しようとする動きが、2010（平成22）年頃から高まりました。

そのような核兵器を持たない国々の主導のも

と、三度にわたる核兵器の非人道性を考える国際会議の開催、核軍縮に関する国連作業部会の開催、国連での核兵器禁止条約に向けた交渉会議を経て、2017（平成29）年7月、国連加盟国の6割を超える122か国が賛成し、核兵器禁止条約が採択されました。

条約の前文には被爆者の苦しみと被害を深く心に留めるとあります。被爆者の「私たちの経験を、もう、誰にもさせたくない」という願いを、国際社会がしっかりと受けとめました。

しかし、採択されただけでは、条約は力を持ちません。本当に力を持つためには、それぞれの国の議会等が国内法にしたがって条約を認め、締結する意志を最終的に決定しなければなりません。これを「批准」といいます。その批准国が50か国となることで、条約は「発効」し、初めて力を持ちます。2019（令和元）年7月現在、署名国が70か国、批准国が23か国という状況です。

日本を含む核兵器に依存する国々などは、条約に今も署名しないとしていますが、条約が発効すれば、それらの国に対する批判や圧力が高まり、核軍縮を進める力となることが期待されています。

6. 核不拡散条約（NPT）

核不拡散条約（NPT）は、核保有国が増える（核が拡散する）ことを防ぐ目的でつくられた条約で、1970（昭和45）年に発効しました。2003（平成15）年1月に一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中で、インド、パキスタン、イスラエル、南スー

ダンの4か国を除く191か国・地域が加入しています。

主な内容は、以下の3つです。

(1) 「核不拡散」

当時、すでに核兵器を保有していたアメリカ・ロシア（旧ソビエト）・イギリス・フランス・中国の5か国だけに核兵器の保有を認め（核兵器国）、それ以外の国（非核兵器国）が保有することを禁止しています。

(2) 「核軍縮」

5つの核兵器国には、保有する核兵器の全廃に向けて誠実に努力していくことが義務付けられています。

(3) 「原子力の平和的利用」

非核兵器国には、原子力の平和利用が認められており、原子力技術や核物質を使用する場合は、必ずそれが平和利用であるかどうかを確認するために、国際原子力機関（IAEA）の査察を受ける義務があります。

・再検討会議

核不拡散条約（NPT）では、条約が定める義務の履行状況を確認し、締約国の取り組みを強化するため、5年毎に再検討会議と、その間に3回から4回の準備委員会が開催されます。

2015（平成27）年の再検討会議において、参加国の多くが核兵器の非人道性（一発で多くの人々を無差別に殺傷する核兵器を使用することは、人間として許されないこと）に言及し、核兵器禁止に向けた法的枠組みについての議論を速やかに開始すべきであると訴えました。

2019年4月29日から5月10日まで開催され

た、2020年核不拡散条約（NPT）再検討会議第3回準備委員会は、来年の2020年NPT再検討会議に向けた勧告文の採択を目指しましたが、核兵器に依存する国々と核兵器を持たない国々との対立は深まり、採択されませんでした。

7. 「核の傘」ではなく、「非核の傘」

相手国が攻撃してきた場合、核兵器で反撃するという姿勢を見せることによって相手国の攻撃を思いとどまらせようとするのを、核兵器の抑止力といいます。しかし、抑止力に固執すると、お互いに相手国より強力な核兵器を保有したり開発しようとしたりするために、核の拡散につながり、逆に核兵器による攻撃の危険性が高まる可能性があります。

日本や韓国、NATO（北大西洋条約機構）に加盟する非核保有国は、いずれも核兵器は保有していませんが、アメリカの持つ核兵器の抑止力を「核の傘」に例えて、その抑止力に依存している国々です。

これに対し、核兵器の抑止力に頼らない方法で国の安全を保障しようとする考え方を、「非核の傘」といいます。長崎市は、その現実的で具体的な方法として、北東アジア非核兵器地帯（8で解説）を提案しています。

8. 北東アジア非核兵器地帯

地域の国々が条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束した地域のことを「非核兵器地帯」といいます。条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることで、核兵器の役割を減らし、核保有

国が核兵器を開発したり、保有したりする動機をなくしていくことにもつながります。

地球の南半球は、1967（昭和42）年のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか4つの条約（南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器条約）によって、すでに陸地のほとんどが非核化されています。

北半球でも、1998（平成10）年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、2009（平成21）年には中央アジア（ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン）非核兵器地帯条約が発効されています。

「北東アジア非核兵器地帯」とは、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。条約が実効力を持つためには、3か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有国（アメリカ、ロシア、中国）が、3か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

2018年以降に高まった朝鮮半島の非核化に向けた国際的な動きを千載一遇の好機として、北東アジア全体の平和のために日本政府が果たすべき役割は大きいといえます。

歴代平和大使名簿



～ 歴代平和大使名簿 ～

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十年度(二〇〇八年)	1	熊川 実旺 (第四中 2年)
	2	別宮 賢治 (第五中 2年)
	3	渡邊 ちさと (六実中 3年)
	4	片野 結依 (小金南中 1年)
	5	清水 のどか (古ヶ崎中 1年)
	6	藤井 彩乃 (新松戸南中 2年)
	7	清水 健人 (金ヶ作中 1年)
	8	神部 莉奈 (新松戸北中 2年)
	9	山本 拓実 (旭町中 3年)
	10	黒木 若葉 (聖徳大学附属中 1年)
平成二十一年度(二〇〇九年)	1	川本 景介 (第一中 1年)
	2	鈴木 亜加里 (第二中 1年)
	3	小幡 祐太 (第三中 1年)
	4	山田 政明 (第四中 1年)
	5	清水 彬奈 (第五中 1年)
	6	久佐野 美奈子 (第六中 1年)
	7	増野 友梨奈 (小金中 2年)
	8	井山 陽菜 (常盤平中 2年)
	9	小林 美幸 (栗ヶ沢中 1年)
	10	熊川 大揮 (六実中 1年)
	11	高島 里夏 (牧野原中 3年)
	12	西 志穂 (河原塚中 3年)
	13	工藤 颯人 (根木内中 1年)
	14	四家 明宜 (金ヶ作中 1年)
	15	児島 一華 (和名ヶ谷中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十二年度(二〇一〇年)	1	櫻井 和奏 (第一中 2年)
	2	吉田 彩乃 (第二中 1年)
	3	三橋 若奈 (第三中 1年)
	4	笹本 幸輝 (第四中 2年)
	5	比嘉 祐哉 (第五中 2年)
	6	後藤 奈穂美 (第六中 1年)
	7	神部 ちひろ (小金中 2年)
	8	田中 萌加 (常盤平中 1年)
	9	高梨 望 (栗ヶ沢中 2年)
	10	岸田 穰士 (六実中 2年)
	11	大山 祭 (小金南中 1年)
	12	渡邊 誠嗣 (古ヶ崎中 2年)
	13	梶浦 美樹 (牧野原中 2年)
	14	斉藤 温人 (根木内中 1年)
	15	富永 由也 (河原塚中 1年)
	16	石井 拓海 (新松戸南中 2年)
	17	中川 剛志 (金ヶ作中 1年)
	18	向田 美紀子 (和名ヶ谷中 3年)
	19	山本 ありさ (旭町中 2年)
	20	新倉 花菜 (小金北中 1年)
	21	田村 陽香 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	染谷 日向子 (専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十三年 度(二〇二一年)	1	佐藤 萌加 (第一中 2年)
	2	発地 空介 (第三中 1年)
	3	岸 健太 (第四中 1年)
	4	宗像 未来 (第五中 1年)
	5	天野 七海 (第六中 1年)
	6	紙崎 莉緒 (小金中 2年)
	7	井山 祥樹 (常盤平中 2年)
	8	加藤 円来 (栗ヶ沢中 1年)
	9	鈴木 理花子 (六実中 3年)
	10	坂本 実優 (小金南中 1年)
	11	谷口 茉奈美 (古ヶ崎中 1年)
	12	對馬 あい子 (牧野原中 2年)
	13	山田 真平 (河原塚中 2年)
	14	新垣 峻太 (新松戸南中 3年)
	15	水谷 春来 (金ヶ作中 2年)
	16	長谷川 結友 (旭町中 3年)
	17	板倉 日向子 (小金北中 1年)
	18	張 敏 (聖徳大学附属女子中 2年)
	19	平野 瑞帆 (専修大学松戸中 2年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十四年 度(二〇二二年)	1	阿部 秀大 (第一中 2年)
	2	茂出来 美樹 (第二中 3年)
	3	小澤 美羅 (第三中 3年)
	4	笠原 卓斗 (第四中 1年)
	5	播磨 渚生 (第五中 3年)
	6	内海 渚 (第六中 1年)
	7	大津 みちる (小金中 3年)
	8	小俣 さやか (常盤平中 1年)
	9	佐藤 優海香 (常盤平中 1年)
	10	阿部 裕美 (六実中 1年)
	11	宮本 龍一 (小金南中 3年)
	12	樋口 杏 (古ヶ崎中 1年)
	13	高橋 あみ (牧野原中 2年)
	14	遠藤 未羽 (根木内中 2年)
	15	後藤 陽 (河原塚中 1年)
	16	鈴木 里歩 (新松戸南中 2年)
	17	岩崎 いぶき (和名ヶ谷中 1年)
	18	伊藤 梢 (和名ヶ谷中 3年)
	19	紀藤 颯斗 (旭町中 1年)
	20	川村 香奈美 (小金北中 1年)
	21	石井 そら (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	中山 皓一郎 (専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十五年 度(二〇一三年)	1	藍原 由梨奈 (第一中 1年)
	2	河野 圭吾 (第二中 1年)
	3	福田 友郁 (第三中 2年)
	4	旗谷 幸亮 (第四中 1年)
	5	宮島 健吾 (第五中 3年)
	6	後藤 美菜 (第六中 3年)
	7	関川 美海 (小金中 2年)
	8	金澤 春樹 (小金中 1年)
	9	阿部 雅治 (常盤平中 3年)
	10	中澤 有稀 (栗ヶ沢中 2年)
	11	加藤 一紗 (六実中 1年)
	12	島田 悠 (小金南中 1年)
	13	大久保 愛深 (古ヶ崎中 1年)
	14	緑間 喜子 (古ヶ崎中 1年)
	15	毎熊 和正 (牧野原中 2年)
	16	猪瀬 柊斗 (牧野原中 1年)
	17	奥野 智朗 (河原塚中 3年)
	18	平野 茜 (新松戸南中 1年)
	19	下藤 誉司 (和名ヶ谷中 1年)
	20	新倉 拓真 (小金北中 1年)
	21	郡司 萌 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	星 さりあ (専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十六年 度(二〇一四年)	1	布川 恭大 (第一中 2年)
	2	白井 悠生 (第二中 2年)
	3	松本 優樹 (第二中 2年)
	4	本間 宏明 (第三中 2年)
	5	旗谷 吏紗 (第四中 3年)
	6	宮島 加奈子 (第五中 1年)
	7	植田 聖杜 (第六中 2年)
	8	合田 健太郎 (小金中 2年)
	9	早崎 諒 (常盤平中 2年)
	10	小井土 瑠冴子 (栗ヶ沢中 1年)
	11	望月 優衣 (六実中 3年)
	12	片野 玲奈 (小金南中 1年)
	13	和田 晴人 (古ヶ崎中 2年)
	14	對馬 悠介 (牧野原中 2年)
	15	井手 麟太郎 (根木内中 2年)
	16	樋口 明日香 (河原塚中 1年)
	17	斎藤 龍秀 (新松戸南中 1年)
	18	久保田 美咲 (和名ヶ谷中 2年)
	19	紀藤 菜桜 (旭町中 1年)
	20	渡邊 龍 (小金北中 1年)
	21	野中 利悦 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	築田 真理子 (専修大学松戸中 3年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十七年 度(二〇一五年)	1	服部 叶汰 (第一中 1年)
	2	瀬谷 恭平 (第二中 2年)
	3	長谷川 勇矢 (第三中 2年)
	4	朝生 蘭 (第四中 1年)
	5	田島 歩夢 (第四中 3年)
	6	佐藤 駿太 (第五中 1年)
	7	小林 優人 (第六中 2年)
	8	山下 優月 (第六中 2年)
	9	田崎 和 (常盤平中 1年)
	10	須藤 巧 (小金南中 1年)
	11	萩原 真央 (小金南中 1年)
	12	大久保 敦康 (古ヶ崎中 1年)
	13	倉重 はるか (古ヶ崎中 2年)
	14	清水 智也 (牧野原中 2年)
	15	木村 史来 (牧野原中 1年)
	16	吉田 真帆 (河原塚中 1年)
	17	飯銅 千尋 (和名ヶ谷中 2年)
	18	井上 未来 (旭町中 2年)
	19	島岡 里帆 (小金北中 1年)
	20	藤井 友紀 (聖徳大学附属女子中 2年)
	21	山田 佳那 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	福島 有香 (専修大学松戸中 3年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十八年 度(二〇一六年)	1	梶原 望音 (第一中 1年)
	2	新井 しほり (第二中 2年)
	3	山本 遥香 (第三中 2年)
	4	大住 春紀 (第四中 1年)
	5	埴 悠莉乃 (第五中 1年)
	6	三橋 世那 (第六中 1年)
	7	山崎 夏海 (小金中 2年)
	8	千葉 京香 (常盤平中 1年)
	9	須藤 未来 (小金南中 1年)
	10	坂本 聖 (小金南中 2年)
	11	相馬 結子 (古ヶ崎中 1年)
	12	中村 莉子 (古ヶ崎中 1年)
	13	水谷 寛樹 (牧野原中 1年)
	14	工藤 翼 (根木内中 1年)
	15	長田 結 (根木内中 2年)
	16	吉田 香凜 (河原塚中 1年)
	17	板橋 来美 (新松戸南中 1年)
	18	中川 和泉 (金ヶ作中 1年)
	19	本田 真樹 (和名ヶ谷中 2年)
	20	羽坂 美柚 (聖徳大学附属女子中 2年)
	21	白石 優美香 (専修大学松戸中 1年)
	22	星名 優歩 (専修大学松戸中 2年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十九年 度(二〇一七年)	1	高橋 聖奈 (第一中 2年)
	2	中木 源 (第二中 3年)
	3	見城 希音 (第三中 1年)
	4	角田 結菜 (第四中 1年)
	5	旗谷 優衣 (第四中 1年)
	6	伊藤 姫那 (第五中 1年)
	7	西田 翼 (第六中 1年)
	8	岡村 タイニー 美波 (小金中 1年)
	9	橋本 尚紀 (小金中 3年)
	10	小池 彩華 (常盤平中 2年)
	11	林 隆正 (栗ヶ沢中 1年)
	12	永野 礼華 (小金南中 2年)
	13	村田 和航 (古ヶ崎中 3年)
	14	榎田 朱里 (牧野原中 1年)
	15	北山 風香 (河原塚中 1年)
	16	スッティブン 凜 (河原塚中 1年)
	17	戸田 美智華 (新松戸南中 1年)
	18	田中 みなみ (金ヶ作中 1年)
	19	佐藤 古都 (和名ヶ谷中 2年)
	20	松本 歌子 (和名ヶ谷中 2年)
	21	中村 葵 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	堀越 菜々 (専修大学松戸中 3年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成三十年 度(二〇一八年)	1	並木 康輔 (第一中 1年)
	2	藤井 拓真 (第二中 2年)
	3	織田 舞衣子 (第三中 1年)
	4	安藤 聡真 (第四中 2年)
	5	林田 唯雫 (第五中 2年)
	6	南畝 亜美 (第五中 3年)
	7	高橋 ヒカル (第六中 2年)
	8	國崎 沙和子 (小金中 2年)
	9	犬尾 まり花 (常盤平中 1年)
	10	佐瀬 綾乃 (六実中 1年)
	11	堀本 大雅 (小金南中 1年)
	12	大木 悠広 (小金南中 3年)
	13	堀越 春生 (古ヶ崎中 1年)
	14	北原 早春香 (根木内中 1年)
	15	平 水音 (河原塚中 2年)
	16	藤田 隆良 (新松戸南中 2年)
	17	小山 杏奈 (金ヶ作中 1年)
	18	森田 和佳奈 (金ヶ作中 1年)
	19	飛田 美紅 (和名ヶ谷中 1年)
	20	島岡 凜 (小金北中 1年)
	21	富田 愛夢 (小金北中 3年)
	22	関野 七海 (専修大学松戸中 2年)





令和元年度
平和大使長崎派遣事業報告書

平和への思い
時代をこえて
語りつごう

松戸市
総務部総務課

令和元年12月発行

